

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

グリーンファーザーの青春譜

サムライ
ファントムと呼ばれた士たち

杉山龍丸著

杉山満丸編集

SAMP
Shosh

i. com



書肆心水

はじめに

昭和五十五（一九八〇）年三月、私が東京の大学を卒業し福岡に戻つてくる時に父・杉山龍丸から言われたのは「もう唐原には帰られんぞ。太宰府の借家に転つたけん、そつちに荷物ば送れ」というものであつた。私は心中で「とうとう来る時が来たか」と思った。

それは、父が「杉山農園の土地は一切お前には遺さない」と小さい頃から繰り返し繰り返し私に言つていたからであつた。曾祖父・杉山茂丸と祖父・夢野久作から長男の父にのみに伝えられた言葉「杉山農園は私物化せずにアジアのために使え」を父が実行に移していった結果であつた。

私が物心ついた時に私の家は山の中について、その丘の入口に郵便受けがあり、そこから一〇〇メートル近く笹の中の細い坂道を登つたところに母屋が建つていて。周りは雑木林に囲まれ、春は梅や水仙の花が咲き、フキノトウが立ち、桜の花が咲き、そして、筍がよきによきと生え、蕨が生え、グミやヤマモモや桑の実がなつた。小学生になると梅の実ちぎりが私の仕事となつた。秋には甘い大きな柿が実つた。大きなヤマモモの木に登ると博多湾が一望できた。お風呂は五右衛門風呂で、中学に入ると山から薪をとつてきて風呂を沸かすのが私の仕事になつた。母屋の一番奥には「奥の部屋」というのがあつて、その部屋の入口にはラス・ビハリ・ボースの肖像画がかかっていた。私が、インドの独立運動家ラス・ビハリ・ボースと曾祖父の関係を知つたのはずっと後のことである。小さい時はその肖像画が怖くて、夜になると奥の部屋に続く長い廊下の左手前

杉山 満丸



夢久庵の入口にあったラス・ビハリ・ボースの肖像画



自宅縁側にて夢野久作の妻と息子たち

にあるトイレに行くのが恐ろしくて仕方なかつた。この奥の部屋が作家であつた祖父・夢野久作の書斎・夢久庵であるのを知つたのも随分大人になつてからであつた。

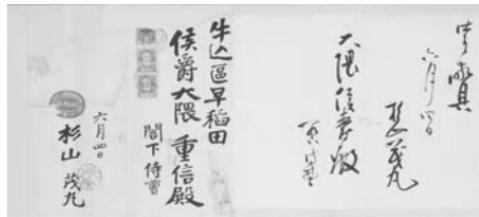
私が小学生になると、丘は少しづつ削られてゆき住宅地に変わつていつた。母屋の周りの雑木林は確実に少なくなつた。それが何のためにそうなつてゐるか？ 敵格で眞面目な父の事に敢えて興味を持たないようにしてゐる思春期の私がいた。

父は二言目には「杉山家の間は……」と言つて私を叱つた。しかし、その当時の私には杉山家の間がなんなのか少しも解らなかつた。また、父は「戦争中は……」と言つて私を叱つた。私は、「平和な日本にて戦争中の話をしても意味が解るわけないやん」と心の中でいつも呟いていた。そんな私の人生には、父が遺した言葉に私を屈服させるに足るに十分な出来事が待ち構えていたのだが、その時は知る由もなかつた。

高校に入ると友人が「夢野久作」が面白いと私に言つた。私が「俺のじいちゃんたい」と言うとびっくりしていたが、私は内心「夢野久作つて少しは知られとつたい」と思つた。何しろ父は「おじいちゃんが生きとつたらノーベル文学賞を取つとするかもしれんとぞ」と言つていたからだが、私は「そんな作家やつたらもつと有名やろうもん」といつも思つていた。予備校に入ると言つてきた。「なんで知つとう」と聞くと「すごい人やん」と言う。

SAMPLE
ShoichiShinji.com

はじめに



杉山茂丸が大限重信に送ったインドの惨状を訴える書簡と同封された餓死寸前のインド人の写真5枚のうちの1枚（早稲田大学図書館蔵）

は「何がすごいのか、ちよんわからん」と思い、だんまりを決め込んだ。
夢野久作も杉山茂丸も私には未知の人であり、「杉山家の間は……」という言葉で私を縛る原因を作った人々であった。

高校二年の時に父に連れられて初めてインドに行つた。父はインドに行く途中、「お母さんが『俺がインドで浮氣しどっちゃないか』と疑つとうけんお前ば連れて來たつたい」と言つて笑つた。初めてのインド行きは悲惨であつた。父は一週間で国連へ行くからといって姿を消した。私は、インドに着いて三日目から下痢が止まらなくなり、結局二週間の間ひどい下痢状態のままライムを搾った砂糖水のみで過ごした。そのあとは体が慣れたのか下痢はピタリと止まつた。そんな私にインドの人々は優しく対応してくれた。

このインド行きで私の心に今でも遺つているのは、国家と国旗に関することである。父が国連へと旅立つた後、私はガンジーの直弟子達の家を回つた。彼らは、私が小さな頃から入れ替わり私の家に来ていた人々である。彼らの家はそれぞれアシュラムという施設の中につつた。その施設に行くと最初に「ナショナルソングプリーズ」と言われた。英語が苦手な私が辞書をめくるとそこには「国歌」とある。「君が代か」と思い覚悟を決めて歌い始めるとインドの人々が直立不動で聴き始めた。私も、心中でびっくりしながら、直立不動で歌い続けた。私の歌が終わると、今度は彼らが直立不動のまま、大きな声で誇らしげに歌を歌い始めた。「インド国歌かな?」と思いながら私も直立不動のまま聞き入つた。

日本に帰つてから父にこの話をすると、父は、「独立して自分の国があるのが当



たり前の日本人には理解しがたいことだが」、と前置きして「インドは長い間イギリスの植民地であった。その間イギリスから搾取され自分たちが作ったものは自分たちのものにならなかつた。自分たちの友人がイギリス人に殺されてもイギリス人は罪に問われなかつた。インドが独立してインド国民が作り出したものは自分たちのものになるようになつた。これは、自分たちの国があるから出来ることであり、その象徴が国旗と国歌だ。だから、インドの人々は国旗と国歌を大切に思つてゐるし独立した喜びを込めて誇らしげに歌うんだよ」と教えてくれた。さらに、「ひいおじいちゃんの茂丸は若い時に香港に行つた。そのとき『犬と中国人は立ち入るべからず』という看板を見て衝撃を受けた。そして、『日本が植民地になつたら大変なことになる』と思い、それからの一生を日本の独立を守ることとアジアの植民地を解放することに捧げた」というような話を私にした。

平成十（一九九八）年四月、私は「水と緑のキャンペーン」を始めていた九州朝日放送の創立四十五周年記念番組「砂漠を緑に 緑の父——杉山龍丸の軌跡」（テレビ朝日系列で全国放映）の取材スタッフに同行し、俳優の田中健さんと共にインドに旅立つた。飛行機の中で、そのときの自分が、父が初めてインドに向かつた歳と同じであることに気がついた。そして、戦争中に片肺貫通の重傷を負い低気圧が近づくと立ち上がることもままならないほどの神経痛を抱え、四十三歳というこの歳からインドに行き始めた父のことを想つた。初めて父が緑化を行なつていた地域に足を踏み入れ、当時の厳しい状況をインドの方々から聞いた。そして、父に対する賞賛の声を聞き続けた。私の胸は震え、涙が頬を伝

うのを止めることができず、その私を見て、インドの人々が優しく肩を抱いてくれた。「インドの独立の父はガンジー、インドの緑の父は杉山さん」、インドの方からの最大の賛辞を聞いたときに父に対する私の心は溶け始めた。日本に帰つてから田中健さんから声をかけていただき、ひくまの出版から『グリーン・ファーザー』を出版させていただいた。それから、さらに十年以上の月日が経ち、私はやっと父が遺したこの本の意味が理解できる歳になつた。

この本は父が「涙を流しながら十年の歳月をかけて書き綴つた」ものだと母から聞いた。読んでいくと、国を想う若者の視点、航空整備の技術者としての視点、日露戦争の国家参謀として国の要人に寄り添つた曾祖父・杉山茂丸の孫としての視点、軍隊という官僚組織にあって中間管理職として現場を預かる者の視点、などなどいくつもの視点が絡み合つて緩られている。何よりも戦場から持ち帰つた整備日誌をもとに綴られたという裏付けが臨場感を与えている。

読者の方が、どのような視点で読み解かれるかはそれぞれの自由であろうが、正直者で曲がつたことが嫌いであった父が杉山茂丸の孫という立場を心に秘めながらまっすぐに生き抜いた戦場の姿を見ていただけると幸いである。そして、その生き様が、壮年期にインドの緑化に尽くしたグリーンファーザーとしての生き様につながつていることを感じただけたらと思う次第である。

なお、文中に出てくる「幻の戦闘機隊」とは、青春時代の父と戦場を共にした「ファンタムと呼ばれた士たち」が所属した部隊の愛称である。

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

目
次

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

はじめに 杉山満丸 3

第一章 「幻の戦闘機隊」の誕生

一、機種改変の準備 19

二、機種改変 23

三、飛行第三十一戦隊戦闘機隊の誕生

24

第二章 フィリピンへの派遣

一、派遣準備 28

二、転進準備 30

第三章 地獄の海上輸送作戦

一、出発 34

二、豚詰の船団 39

三、最後の航海 47

四、地獄の遭難 55

五、無間地獄 64

六、遭難の話題 74

第四章 飛行第三十一戦隊の作戦準備

一、遭難よりの再起 84

二、作戦準備 94

SAMPLE
Shishi-Shinsut.com

第五章

特攻隊攻撃

三、ファブリカ基地について	105
四、嵐の前	116
五、嵐の動き	124
一、特攻隊発企の前	133
二、特攻隊発企直前の状況	141
三、特攻隊発企について	149
四、特攻出撃と戦況	158
五、激闘のあと	168
六、戦場掃除	176

第六章

戦隊全滅と再建

一、戦隊全滅	185
二、空虚の戦場	194
三、戦力0	204
四、戦隊再々編成	209
五、戦隊出撃と全滅	222

第七章

レイテ総攻撃戦

一、レイテ総攻撃参加	238
二、レイテ総攻撃計画	246
三、レイテ総攻撃戦	256

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

第八章

飛行第三十一戦隊終焉への戦い

- 四、レイテ作戦の瓦解 268
- 五、ネグロス島の戦慄 284
- 一、消耗戦への戦い 298
- 二、コンソリデーテッドB-24の攻撃 306
- 三、リンガエン湾米軍上陸作戦前 314
- 四、戦隊最後の特攻隊 323
- 五、現地自活訓練の悲喜 330
- 六、幻の戦闘機隊の終焉 339
- 七、飛行第三十一戦隊の最後 346

あとがき 359

編集後記 杉山満丸 366

杉山龍丸略年譜 376

SAMPLE
Shoshi-Shinsu.com

特記

これは、飛行第三十一戦隊の整備隊隊長であった私が、現地で整備日誌に記録（メモ）した部隊の活動とそれに伴う記憶を記述したものである。

戦後、比島（フィリピン）戦における日本軍の実状を記録したものがほんどのない状況にあって、防衛庁戦史室で編纂された比島捷号^{レコード}陸軍航空作戦（太平洋戦争中に日本の大本営が立案した作戦。予想される決戦方面に捷一號から捷四號の四つに区分された。捷号作戦は比島方面）は、この整備日誌を参考資料として採用している。しかし、完成した防衛庁戦史室編纂の「比島捷号^{レコード}陸軍航空作戦」をみると、私が所属していた第四航空軍、第二飛行師団での命令等については、大本営その他の記録を採用しており、また、私以外の多くの人々の記憶に基づく証言によつて作成されたと思われる点がある。

これに対して、私の整備日誌の命令・状況は、全て現地の第一線において、私が自ら体験し記録したもののが根拠としている。それらの記録は、実証できるものであることをここに明記して置く。
これから述べる戦記の表題・各章・各項は、作戦名や日時の経過によつて記述するのを例とする。敢えて、最も印象的な状況をもつて記述した部分もあるが、内容そのものは、日時・作戦の経過を忠実に、第一線部隊の事実に基づいて記述したものである。

元比島第四航空軍第二飛行師団
飛行第三十一戦隊整備隊隊長
隼集成戦闘機隊整備隊隊長

元陸軍少佐 杉山龍丸（陸士五十三期）